TADOKU JUNIOR 自然のふしぎ神話 ★★★☆☆ ふつう 352語

How the Robin's Breast Became Red

コマドリのむねが赤くなったわけ

Flora J. Cooke（1895年の本） 原文そのまま 朗読：Linette Geisel

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？ 寒い北の国にたった一つしかない火を、白いクマがほとんど消してしまいました。それを見ていたはい色のコマドリは……。

Long ago in the far North, where it is very cold, there was only one fire.

A hunter and his little son took care of this fire and kept it burning day and night. They knew that if the fire went out the people would freeze and the white bear would have the Northland all to himself. One day the hunter became ill and his son had the work to do.

For many days and nights he bravely took care of his father and kept the fire burning.

The white bear was always hiding near, watching the fire. He longed to put it out, but he did not dare, for he feared the hunter's arrows.

When he saw how tired and sleepy the little boy was, he came closer to the fire and laughed to himself.

One night the poor boy could endure the fatigue no longer and fell fast asleep.

The white bear ran as fast as he could and jumped upon the fire with his wet feet, and rolled upon it. At last, he thought it was all out and went happily away to his cave.

A gray robin was flying near and saw what the white bear was doing.

She waited until the bear went away. Then she flew down and searched with her sharp little eyes until she found a tiny live coal. This she fanned patiently with her wings for a long time.

Her little breast was scorched red, but she did not stop until a fine red flame blazed up from the ashes.

Then she flew away to every hut in the Northland.

Wherever she touched the ground a fire began to burn.

Soon instead of one little fire the whole north country was lighted up.

The white bear went further back into his cave in the iceberg and growled terribly.

He knew that there was now no hope that he would ever have the Northland all to himself.

This is the reason that the people in the north country love the robin, and are never tired of telling their children how its breast became red.



和訳 コマドリのむねが赤くなったわけ（How the Robin’s Breast Became Red）

むかし、とても寒い遠い北の国には、火が一つしかありませんでした。

かりゅうどとその小さなむすこが、この火の番をして、昼も夜ももやしつづけていました。もし火が消えたら、人々はこおえてしまい、白いクマが北の国をひとりじめしてしまうと、ふたりは知っていたのです。ある日、かりゅうどが病気になり、むすこがその仕事をすることになりました。

何日も何日も、むすこはゆうかんにお父さんの世話をし、火をもやしつづけました。

白いクマはいつも近くにかくれて、火を見はっていました。火を消したくてたまりませんでしたが、かりゅうどの矢がこわくて、とてもできませんでした。

男の子がつかれてねむそうにしているのを見ると、クマは火に近づいてきて、こっそりわらいました。

ある夜、かわいそうな男の子は、つかれにたえきれなくなって、ぐっすりねむりこんでしまいました。

白いクマは大急ぎで走ってきて、ぬれた足で火にとびのり、その上をころげ回りました。とうとう火がすっかり消えたと思い、クマは大よろこびで自分のほらあなへ帰っていきました。

一羽のはい色のコマドリが近くをとんでいて、白いクマのしたことを見ていました。

コマドリは、クマが行ってしまうまで待ちました。それからまいおりて、するどい小さな目でさがして、とうとうまだもえている小さな炭のかけらを見つけました。コマドリはつばさで、長いあいだしんぼう強くそれをあおぎました。

小さなむねが赤くこげましたが、はいの中からりっぱな赤いほのおがもえ上がるまで、コマドリはやめませんでした。

それからコマドリは、北の国の小屋の一つ一つへとんでいきました。

コマドリが地面にふれた所では、どこでも火がもえはじめました。

まもなく、小さな火が一つだったのが、北の国じゅうが明るくなりました。

白いクマは、氷山のほらあなのもっとおくへ入っていき、おそろしい声でうなりました。

北の国をひとりじめできるのぞみは、もうないとわかったのです。

こういうわけで、北の国の人々はコマドリが大すきで、コマドリのむねがどうして赤くなったのかを、あきることなく子どもたちに話して聞かせるのです。

たんご と クイズ　コマドリのむねが赤くなったわけ

fire 火	**hunter** かりゅうど	**white bear** 白いクマ（ホッキョクグマ）
arrows 矢	**robin** コマドリ（ロビン）	**wings** つばさ
iceberg 氷山		

Q1 白いクマは、どうやって火を消そうとした？

① ぬれた足でとびのって、ころげ回った　② 雪をかけた　③ 息をふきかけた

Q2 コマドリのむねが赤くなったのはなぜ？

① 赤い木の実を食べたから　② ペンキがついたから　③ 火をあおいでいて、こげたから

Q3 コマドリが地面にふれた所では、何が起きた？

① 花がさいた　② 火がもえはじめた　③ 雪がとけた

こたえ

Q1 ①　白いクマはぬれた足で火にとびのり、その上をころげ回って、火を消そうとしました。

Q2 ③　小さな炭のかけらをつばさであおぎつづけているうちに、むねが赤くこげたのです。

Q3 ②　コマドリが地面にふれた所ではどこでも火がもえはじめ、北の国じゅうが明るくなりました。

原田英語の多読ベストジュニア

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #30800（Flora J. Cooke、1895年）。パブリックドメイン。
挿絵：(1895 edition)（同じ本の初版の挿絵。パブリックドメイン）
朗読（Web版）：Linette Geisel（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）
和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは３重チェック。人の目でも順次確認しています。